慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ライフストーリーとオートエスノグラフィー
Sub Title	Life story and autoethnography
Author	高山, 真(Takayama, Makoto)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2017
Jtitle	哲學 No.138 (2017. 3) ,p.41- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : アートベース社会学へ#寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000138-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ライフストーリーと オートエスノグラフィー

高　山　　真*

Life Story and Autoethnography

Makoto Takayama

1. Personal life history
2. Life story
3. Autoethnography
4. Life story and Autoethnography

Key words: Life story, Autoethnography

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師

1. パーソナル・ライフ・ヒストリー

本稿は，2016 年 7 月に東京芸術大学にて開催されたカルチュラル・タイフーンの個人報告をふまえて，それを再構成しつつ，カルチュラル・タイフーンの前後になされたいくつかの研究会，ゼミでの議論をとおして，あるいは大学という場を離れた日常的な会話や，個人的な記録，たとえば日記を対象として考えたことを整理し，ライフストーリー・インタビューの経験を表現するというテーマについて考察するものである．

なぜ，このような作業が必要なのだろうか．その理由は，このカルチュラル・タイフーンでの報告は，長年にわたって取り組んできた長崎被爆者とのライフストーリー・インタビューのひとつの区切りになり，この報告の準備を進めるなかで，これまでの調査研究（フィールドワーク）の意味を，もういちど見つめ直そうとした実感があるからである．その実感は，ライフストーリーを聞くという他者を理解することを試みる営みと，調査者である私が自分自身の経験をフィールドワークして記述するオートエスノグラフィーという二つの営みを考える際に記録しておくべき，つまり，質的調査という営みを考えるために，考えるに値する感情であり，記憶であるように思われる．

これは，はたして学術成果と言えるのだろうか．こうした作業にとりくむ理由は，基本的には，個人的なことなのかもしれない．たとえて言うなら，これは，日記を書くという作業に近いのかもしれない．しかし，これから記すような個人的なことを言葉にして記録し，学術的な成果として報告することには，一定の意味があると筆者は考えている．その判断については読者に委ねるしかないが，はじめに，私なりに，ある種の記述のスタイルをとり論文を書く意図を説明しておきたい．それは，筆者自身が取り組んできた調査や研究について説明することである．

筆者は，1998 年の春に，生まれた場所である京都を離れて，長崎大学に進学した．その後，2005 年の春から長崎に暮らす被爆者とのライフス

トーリー・インタビューの実践に着手するようになる．その間の，長い時間を長崎で生活しながらインタビューをつづけて，2013年の春に博士論文『長崎原爆被災の記憶』を慶應義塾大学大学院社会学研究科に提出した．公開審査を経て，学位が授与されたあと，この論文を書きなおす作業にとりくみ，2016年の7月に『〈被爆者〉になる　変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』という学術図書が出版されている．この論文と，図書は，異なる別のものである．後述するように，論文は長崎で書かれ，図書は別の場所で書かれている．長崎という場所で，この論文が書かれたことには，それ自体に意味が含まれていると思われる．

これまで私がとりくんできた調査と研究を説明するために，簡単に振り返ると，このようになる．1998年，はじめて長崎を訪れた日から，2016年までの18年という時間が経過している．言い換えると，つぎのように表現できるのではないだろうか．あの日から，いまに至るまでの「歴史」を見つめるとき，〈わたし〉には「18年」という時間が積み重ねられてきた．それは，まだ短い時間なのかもしれないが，そこには，個人の時間の積み重なりとしてのライフヒストリーの萌芽を見ることができるのではないかと思われる．

私は，しばしば，日常の生活のなかで，なぜ，〈わたし〉は，この「18年」という時間，長崎という場所に関わり，そこに住まう人びとについて考え，なにかを書きつづけてきたのだろうかと考えている．長崎という場所との関わりというとき，それは，その場所で暮らすことを念頭においている．その場所に暮らしている人びととのインタビューをつづけて，そのインタビューについて，その場所で，書く．書くという営みは，調査にたずさわる私の経験を文字として記録し，定位する営みである．その作業を，長崎でおこなうということは，すくなからず，研究の〈成果〉としての論文に影響を与えたはずである．

私は，博士論文を，長崎の西小島という場所で書いた．それは，ライフ

ストーリー・インタビューの協力者である，ある語り手が，幼少期を過ごした場所である．長崎の路面電車に乗ったことがある人であれば，その名前を聞いたこともあるのではないだろうか．正覚寺下という電車の停留所から，かつての遊郭として知られる丸山を通り抜け，長崎に特有の坂を登りはじめる．そのあたりには，車がとおることができる道もあるが，私が論文を書いた場所は，車が通ることはできない，入りくんだ路地から，歩いて階段を上ったところの，さらに奥にある小さなアパートである．

けっして，恵まれた環境とはいえない場所である．私のように，行きずりの者であればともかく，この場所で長年にわたり生活をつづけることは，とても厳しい．私は，この小さなアパートで，すこしづつ，博士論文を書きつづけた日々を忘れることはないだろう．なぜ，そのように思うのだろうか．それは，その日々が「論文を書く」という，ひとつの「フィールドワーク」として捉えることができる時間であったからであり，その時に私が体験したことは，長崎で過ごした生活の経験，被爆者とのインタビューの経験と同じように大きな意味をもつ，重要な経験であるように思われるからである．その経験とは，どのような経験なのか．そうした疑問に，簡潔に答えるなら，それは「被爆者になる」という他者の経験の語りを，論文を書くことにより理解していくという経験である．

2. ライフストーリー

このようにして書かれた博士論文に詳細に描かれているように，「被爆者になる」という語りは，1945 年 8 月 9 日に長崎で被爆を体験している，ある語り手が，その体験の意味を，他者の体験を聞く中で見つめて，体験を広めていくことを意味する．それは，被爆者としての〈わたし〉の深まりも意味している．

この論文には，3 人の語り手が登場する．ひとりは，みずからの被爆の体験を芝居にして上演しつづける T さんである．もうひとりは，教育の

実践として被爆の記憶を次世代に伝えようとするＹさんである．そして，Ｍさんという語り手は，みずからの生きてきたプロセスを「被爆者になる」という言葉で表現し，ライフストーリーを語る．

博士論文を書籍化する際に，Ｔさんのライフストーリーの分析と記述については，全面的に改稿するように試みた．そこには，Ｔさんの死という現実に，もういちど向き合いたいという筆者の心理が反映されていたはずである．ロバート・リフトンの知見に照らして解釈するなら，ここには，亡くなったＴさんが許してくれるだろうかという，死者にたいして，生き残った者が抱く罪の意識が影響していたのかもしれない．

Ｙさんは，長期にわたるインタビューのなかで，幼少期の被差別の記憶を語ってくださった．その被差別の記憶の語りに関連して登場する場所が，さきに触れた西小島である．〈わたし〉はＹさんのライフストーリーを聞きとり，Ｙさんの声を，トランスクリプトを作成することにより文字に変換し，文字になったＹさんの記憶の語りを分析する．その作業を，かつて，Ｙさんが両親とともに暮らしていたと語られている，西小島にある小学校の近くのアパートでつづけた．

このような環境のなかで論文を書きながら，わたしは，毎日のように，長崎の街を歩きつづけていた．なんとも不思議な気持ちがしていた．それは，たんなる偶然とは思えなかった．インタビューをはじめた頃には，まさか，そのインタビュー協力者であるＹさんが，はるか昔に暮らしていた場所に，一時的であれ自分が暮らすことになるとは考えてもいなかった．博士論文にも記述されているように，たとえば，長崎の被差別部落とされていた浦上町の記憶をいかに書くかという問題は，長崎原爆被災の記憶の表象という問題系において，きわめて重要な課題になる．つまり，それは，端的に「書く」ことがきわめて困難な問題である．

この問題を書く手がかりを与えてくれたのは，Ｍさんと，浦上を「歩く」という実践であった．三菱と長崎の記憶をテーマにする社会学の論文

を，ともに読み，話し合い，その論文を地図として，ふたりで浦上を歩く．このシンプルな営みをとおして，〈わたし〉は，浦上町という場所に接近することができた．もちろん，M さんとともに，論文を読むにいたるまで，それについて話し合うにいたるまで，ともに歩くようになるまでには，さまざまな，やりとりがなされている．

M さんは，ふたりで浦上を歩いてから，しばらく経った，ある日，その日に撮影した写真を送ってくれた．そこには，浦上町の共同墓地の慰霊碑のまえに立つ〈わたし〉が映っていた．わたしは，その写真を見つめながら，とても不思議な感覚をいだいた．そこにいる〈わたし〉は，いったい誰なのだろうかという感覚である．〈わたし〉は，その後，何度も，浦上町の共同墓地を訪れた．林京子が小説の舞台とした三菱兵器大橋工場の跡地（現在の長崎大学文教キャンパス）から，西小島の住まいまで，1 時間半ほどをかけて歩く．こうしたフィールドワークのなかで，爆心地を通り，かつての「浦上町」に近づくにつれて，自分自身の存在が薄れていくような感覚を抱いたことがある．

浦上町の共同墓地で，慰霊碑のまえに立ち，頭をさげて黙祷し，その場所で亡くなった人びとを想像する．被爆の記憶のフィールドワークということを意識していたからだろうか，あるいは爆心地を中心とする同心円というイメージを意識していたからだろうか．北から爆心地にむけて歩き，爆心地からすこし離れた場所にたたずみ，そこでかつて生活した人びとを想像するときに，〈わたし〉には，かつて，そこで，暮らしを営んでいた人びとの姿が見えた．すくなくとも，そのような感覚を抱いた記憶は，鮮明に蘇ってくる．

話は迂回したが，ここで述べたいことは，このように「常識」の感覚をおおきく手放した心的状況のなかで，博士論文は書かれたということである．ここでいう常識とは，目に見えるものを信じる価値観である．そうした価値観を手放したなかで，〈わたし〉は，Y さんのかつての被差別の体

験の語りに強く共感しながら，その体験を書き，さらには，より複雑な構造でなりたっていると思われるMさんの「被爆者になる」というライフストーリーの理解にアプローチしていったのである．

3. オートエスノグラフィー

若松英輔は，『悲しみの秘義』という著作の冒頭で，つぎのように述べている．

> 一見すると希望にあふれた者のように見えてもそんなとき人は，人生の問いから遠いところにいる．人は，自分の心の声が聞こえなくなると他者からの声も聞けなくなる．（若松 2015: 4）

オートエスノグラフィーという営みの意義は，ここに，そのエッセンスが表現されているのではないだろうか．なぜ，調査をする者が，あるいは社会学者が，自分自身の経験に耳を傾け，自分自身の経験を書こうとしなければならないのか．ライフストーリーを聞くというのは，あくまでも他者の経験に耳を傾けることであり，インタビューは他者の経験を理解することを目指してなされているはずである．

それは，当然のことであり，ライフストーリーを聞くという営みは，他者を理解することを目的としている点に疑問の余地はない．しかし，他者の語りに耳を傾けるというのは，言葉にすると容易いけれども，案外にむずかしいことである．長崎で，かつて，被爆を体験した人びとの経験に耳を傾けること．そこには，いくつもの層にわたって，経験を聞くことの困難が横たわっている．

浜日出夫の考察を参考にして，その困難さを整理しておこう（浜 2007）．まずは，すでに体験を語ることができる人が少なくなってきているということ．いわゆる，被爆者の高齢化という問題である．もうひ

とつは，より根本的な問題として，被爆を語ることの困難さ，つまり出来事の表象不可能性という問題である．この表象不可能性という問題は，出来事の理解不可能性と伝達不可能性という問題と密接に関連している．

たとえば，アラン・レネの映画「ヒロシマ・モナムール」において描かれているように，ヒロシマという出来事を理解することは，そもそも，きわめて困難なことである．ヒロシマを「見た」,「見なかった」というフランスからヒロシマを訪れた女性と日本人の男性のあいだで繰り返される会話は，まさに，体験した者と，体験していない者という，被爆をめぐる認識を「体験」という指標により差異化していく現実を予見するように表現しているようにもみえる．

写真家の東松照明は，長年にわたり長崎の被爆者の撮影をつづけている．そのなかで，東松は，長崎に通いつづける自分自身の心情を見つめて説明しようとする際に，アラン・レネの映画に触れて，つぎのように述べている．

> アラン・レネの『二十四時間の情事』じゃないけど，“見た，見ない，見た，見ない”という体験はしょせん体験者じゃないとわからない．しかし体験を身近にひきよせるためには，それと似た体験にひきくらべることによってしか，それに近づくことができない．
>
> にもかかわらず，依然として〈見た〉と〈見ない〉の距離は大きい．その距離を行動によって埋めることができるであろうか．写真を撮ってゆくことによって，それを埋めることができるであろうか，といった“問い”がさらに，その翌年ぼくを長崎へかりたてるのです．（中略）一年間という時間の経過の中で“自分がどれだけ変わったか”といった，残酷なまでの省察，自己凝視ですね．この自己凝視というのは，行きつく先がどこにもなく，ついにそれ自体を目的とするようにしばしばなりやすいものですが，どうしてもぼくはそこから出られなくて，アラン・レネの繰りかえしを繰りかえし，その翌年三度目の長崎行きを実行

することになります．（東松 2005: 18）

1930年に生まれ，戦争を体験している世代の東松にとって，長崎の被爆者とは，どういう存在であったのだろうか．石田忠が長崎被爆者の生活史を調査した際に「反原爆」のモデル被爆者としてとりあげた福田須磨子を，東松照明も撮影している．福田須磨子について，東松はつぎのように書いている．

16年前，はじめて長崎のお宅に訪ねたとき，あなたは，エリテマトーデス（紅斑症）とかいう厄介な病気のため，筆舌に尽くし難い病苦の日々を過ごしていらっしゃいました．

あのとき，あなたは，気おくれして写真も撮れずにいた私を逆に励ましてくれました．そして，すすんでカメラの前に立ってくださいました．

後日，私はあなたがお書きになった生活記録『われなお生きてあり』を読み，深く考えさせられたものです．文中「私は今，何をしなければならないか，本当にわかって来たような気がした．私に課せられたもの，私でないと出来ないもの，それは被爆者問題を世に訴えること……」とあります．そう，あなたは，「私でないと出来ないこと」としてカメラの前に立たれました．では，そういうあなたを撮った私自身は，私でないと出来ないこととしてシャッターを切っただろうかと．

実をいうと，あなたの顔かたちといい気性といい，私の母にそっくりなのです．だからといって，撮すことの後ろめたさは拭いようもありませんが．それは，二十数年間写真を撮りつづけ，四〇を半ばに過ぎてなお脱しきれない心の迷いです．

ここには，東松という人が，写真家という立場からだけではなく，ひとりの人として，福田須磨子という人に向き合い，出会おうとする姿が描か

れているように思われる．私は，こうした東松の文章や，写真を眺めて，ときに長崎での社会学的フィールドワークの参考にしてきた．飯沢耕太郎も述べているように，すぐれた写真家は，ときにすぐれた文章を書く（飯沢 2003）．たとえば，ここに引用した文章には，社会学的に被爆者のライフストーリーを研究する，つまり他者を理解する際に手がかりになるいくつかの論点が言葉として表現されている．

被爆を体験した福田須磨子が，「私に課せられたもの，私でないと出来ないもの」として自己を語り，被爆者として社会問題を訴える主体性を形成していく．こうした論点については，石田忠が詳細に分析している．「私でないと出来ないこと」として，写真を撮っていたかという反省についても，社会調査に携わる者の立場の問題として，石田も論及している．注目したいことは，引用した最後の一段落にある．

ここには，原爆を見た者と，見なかった者，あるいは体験した者，体験しなかった者という区別を超えて，ひとりの人と，ひとりの人として，福田須磨子に向かっていく，東松照明という人の姿が現れているように思われる．もちろん，東松は写真家であるから，東松の「ことば」をそのまま受けとるなら，写真を撮るという「行動」によって，福田須磨子との距離を近づけていったのであろうか．さきの引用に記している「体験を身近にひきよせるためには，それと似た体験にひきくらべる」ということばは，偶然にも，「被爆者になる」という言葉によって，M さんが表現しようとしている生き方の語りと，そう遠くはないところから発せられているように聞こえてくる．

そのように，ふたりの語りが〈わたし〉に聞こえてくるということは，原爆を見た M さんと，原爆を見たわけではない東松というふたりの人は，おなじように，この社会を生きている人であるはずである．この論点は，「見る」という視点から，出来事の表象を考察するために，さらに深められていく別のテーマの補助線となっているはずである．それは，とりもな

おさず，出来事を「語る」という問題につながっていく．

若松の引用に立ちかえり，オートエスノグラフィーについて考えてみたい．人は，自分の心の声が聞こえなくなると，他者からの声も聞こえなくなるのだろうか．それは，どういうことなのだろうか．2005年にはじめた長崎でのインタビューをつづけていくなかで，2008年に東京から長崎へと住居を移したことは，おおきな転換点になったように思われる．その数ヶ月前に，〈わたし〉は弟を亡くしている．

2007年の12月に弟は他界したが，その日のことは明瞭に覚えている．しかし，弟がどのように生きて，どのようにして，この世を去ったのか．〈わたし〉は，彼の人生を十分に知っているわけではない．考えてみれば，不思議なことである．長崎で知り合った，3人の語り手については，インタビューをとおして，彼らの人生や生活，生涯について多くのことを聞きとり，それを記録し，彼らのライフと，〈わたし〉の経験を重ね合わせることさえ試みている．しかし，弟について，〈わたし〉は，いったいどれだけのことを知っているのだろうか．

1998年に長崎へ転居してから，広い意味では，すでにフィールドワークは始まっている．その後，弟は，大学に進学した．2007年12月に他界した弟の生前の入院生活を想像してみよう．弟は，大学に進学した後に，小児性白血病を患い長期にわたる入退院をくりかえして，治療を続けていた．その頃の彼の生活について，私は詳しいことは知らない．

そうした生活をつづけることは，彼にとって，心の面でも，体の面でも，とても辛いものであったであろうと想像できる．両親は，当時の状況については多くを語ることはない．当然，思い出したくないという気持ちもあるのだろう．私が，生前の弟を最後にみたのは，実家のリビングであったように思う．治療のために，頭髪がなくなり，とても痩せていた．顔色もよくなかった．

弟の姿をみて，もう，長く生きることはできないのだろうと，冷静に

思った．それが，いったい，いつだったのか，それも正確には覚えていない．彼が，どのような治療を受けていたのか，どのような病気だったのかも，正確には知らない．母は，ときに，弟が入院中に話していたことを思い出し，語る．医学部の学生だった彼にとって，研修で病室を訪れる同世代の医学部の学生と顔をあわせることが，いかに精神的に苦痛であったか．母の励ましの言葉が，彼にとって重荷となり，反発する言葉をなげかけたこともあったと話すことがある．彼女にとっては，それが，辛かったということ．病気を患ってから，約５年後，彼は，誰もいない病室で，一人で，他界した．誰も，みていないときに，彼は，この世を去った．

母のこうした語りをきくとき，私は，もしかすると，彼は，自ら死を選んだのではないかと思ってしまうことがある．その時の彼の心理は，私の想像を超えているのだろうと思う．もちろん，どのように想像したところで，それは生き残っている者の推測にすぎない．彼は，死の間際に，いったい，なにを思い，なにを考えていたのだろうか．できることなら，それを知りたいと思う．

ライフストーリーを語るということは，それまでの生きてきた体験に意味を与えることであるなら，この世を去るまでに，人はその体験を語り，すくなくとも身近な他者には，伝えていく必要があるのではないだろうか．それは，自分の心の声を聞きとり，他者に伝えることである．オートエスノグラフィーとは，そうした試みであるように思われる．それは，生きている者にしかできないことである．

弟が死をむかえたあと，彼との死別の体験を，〈わたし〉の体験としてではなく，子を亡くした母の悲しみの経験として，Ｍさんに語りかけた．おなじ人を亡くしたはずであるが，弟を亡くした〈わたし〉の悲しみは，子を亡くした母の悲しみに比べれば，悲しみが浅いのではないだろうと考えたからである．その考え方が正しいのかどうかは，わからない．人の悲しみを比べることなどできるはずがない．

被爆を体験した人びとが，爆心地からの距離や，当時の年齢や，外傷の程度によって体験を比較し，序列化する現実があるという語りは矛盾にみちている．そのような語りが正当化されることがあってはならないと感じる感情は，けっして間違ってはいないし，そのように感じることはきわめて自然なことである．それと同じように，子を亡くした母の悲しみと，弟を亡くした〈わたし〉の悲しみは，悲しみの質には，なにかしらの違いはあるのかもしれないが，いずれの悲しみが深いという問題ではないはずである．

いずれにせよ，その当時は，そのように考えた〈わたし〉は，Mさんに子を亡くした母の悲しみを想像することがありますと語りかけたのである．いまから，その当時を振り返ると，そこで〈わたし〉がMさんに語りかけたことは，「自分よりも，もっと大変な思いをした人たちの体験を聞きとり，それを自分の体験として内面化していくことで，自分の体験が広まり，自分自身が深まっていったと思います」というMさんの基本的な考え方をあらわす語りと，同じ方向を見ているように思われる．

Mさんも他界したいま，このことについて，もうすこし考えてみたい．

4. ライフストーリーとオートエスノグラフィー

なぜ，Mさんのライフストーリーを理解するために，〈わたし〉の経験を書かなければならなかったのだろうか．それは，そう簡単には答えをだせない問いのように思われるが，ライフストーリーとオートエスノグラフィーというテーマは，その問いにアプローチするものである．オートエスノグラフィーに関する先行研究をふまえて岡原正幸が指摘しているように，それは「方法」というほどには技巧的なものではない．

オートエスノグラフィーとは，まず「自分の過去の経験を書き記す作業」であり，「実際に体験した現場に生々しく立ち戻り，経験された感情を生き戻すこと」であり，つぎに「その現場を離れ，感情が高まっている

うちに書く」ことを繰り返すことが求められている（岡原 2014: 78）．こうした記述に際しては，さまざまな文体をもちいても構わず，小説，詩，フォトエッセイ，日記なども想定されている．

こうした，論点に触れたときに思い起こされるのは，歴史哲学の領域でなされてきた，出来事の表象をめぐる歴史叙述の文体にかんする議論である．たとえば，ホロコーストのように表象不可能な出来事について，どのような文体で，その歴史を叙述することができるのかという議論である．たとえば，ヘイドン・ホワイトは，対象について書くことが，書き手に変容をもたらすような文体に出来事の表象の可能性があるのではないかという論点を提起している（White 1992＝1994）．

こうした論点は，自己の経験について書きながら，そのように自己の経験を書くことが，なにかしらのかたちで他者の経験に重ねあわせられたり，他者の経験に接続されていくことが理想的とされるオートエスノグラフィーの実践と重なるところがあるのではないだろうか．すくなくとも，極限的な歴史の経験であれ，自己の経験であれ，経験を書くという点においては同じであり，その経験を書くことが，書き手にある種の変容をもたらす可能性があるという点においても共通するところがあるように思われる．こうした論点については，あらためて別のところで検討してみたい．

ここでは，もうすこし，具体的なことがらに寄り添って，ライフストーリーとオートエスノグラフィーという論点について考えたい．カルチュラル・タイフーンでは，フロアからつぎのような質問が寄せられた．〈わたし〉の経験として，弟の死について語られているが，それは，M さんの「被爆者になる」というライフストーリーを理解することと，どのような関係があるのだろうかという質問である．この質問は，端的に，ライフストーリーを聞きとり，ライフストーリーを理解することと，オートエスノグラフィーを書くこと，そのふたつの営みの関係を問うている．

この質問にたいして，私はつぎのようにこたえた．〈わたし〉の弟は，

白血病によって他界した．高校の教員であったMさんは，かつて，自分の教え子を白血病で亡くしている．彼はその体験を手記にして残している．彼は，教え子を白血病で亡くすという自分に生じた出来事を書くことにより，「被爆二世」という問題を社会問題として訴える被爆者としての主体性を形成していく．すくなくとも，〈わたし〉は，Mさんの手記をそのように読んでいた．

Mさんとのインタビューをはじめてから，インタビューをつづけるだけではなく，彼がそれまでに書いてきた手記や，彼が「聞き手」として記録した被爆体験の「聞き書き」を収集した．こうした個人にかかわる文書の記録（パーソナルドキュメント）の収集もフィールドワークである．〈わたし〉は，インタビューをつづけながら，こうした手記や，聞き書きの記録をすこしづつ読みすすめていた．しかし，こうした手記を読みながら，いつも，つぎのような感想をいだいていた．彼が，これまでの時間を生きるなかで出会ってきた，さまざまな出来事や体験は，なぜ，これほどまでに被爆の経験として語られるのだろうかという感想である．

それほどまでに，被爆という経験は，おおきな意味をもつからである．そういう答えは，もちろん「理解」しているのであるが，はたして，そのように「理解」してしまってよいのであろうかという違和感といえばよいだろうか．Mさんの語りは，Mさんにかぎらず，インタビューに応じてくださった方がたの語りは，けっして，むずかしい言葉では語られない．いわゆる，日常の言葉で語られる．それは，手記や，聞き書きの記録においても，つまり，書き言葉においても変わらない．

彼らの語りや，文章は，読めば「わかる」はずである．しかし，〈わたし〉はけっして，彼らの語りや，書かれた言葉を理解できない．彼らの言葉を，わかってはいけないという思いが，〈わたし〉にはあるのかもしれない．そして，おそらく，その感覚は正しいと，わたしは考えている．Mさんは，教え子を白血病で亡くしたときに，その教え子の両親が被爆を体

験していることに思いをはせて，教え子の死をとおして，被爆を体験した自分もいつか白血病になるのではないかと心配になったという，自分自身の心の変化を書いている．

もしかすると，こうした手記は，M さんによるオートエスノグラフィーの実践といえるのかもしれない．彼は，他者の死という出来事について書きながら，自分自身の心の変化を書き，被爆を体験した「わたし」という存在が社会的にどのような意味があるのかをみいだしていく．〈わたし〉は，M さんが，自分自身の経験を冷静に見つめて，その社会的な意味を見いだしていこうとする生き方に関心を示している．いずれにせよ，彼は，教え子という身近な他者の死をみつめて，その体験を書くことをとおして，被爆者になっていったのである．

そのことを理解するためには，いったい，何が必要なのだろうか．すでに触れている岡原の指摘にもみられるように，オートエスノグラフィーとは，「方法」というほどには「技巧的」なものではないように思われる．おそらく，オートエスノグラフィーには，感情や心にかんする繊細な記述が求められ，その記述を読む人にも繊細な感受性が求められる．そもそも，オートエスノグラフィーを書こうとする人は，そのことを書かずにはいられないから，いいかえれば，書かずにはいられないほどに，その対象となることが書く人にとって重要な意味をもっているから書いているのではないだろうか．

M さんは亡くなってしまったいま，その文章を記したときの心情を，書き手へのインタビューにより聞くことはできない．しかし，さしあたり，書き手がどのように思って書いたのかを知ることが大切なのではなく，書き手の心理を想像することが求められるのではないだろうか．わたしは，つぎのように想像する．まず，なによりも，M さんという人は，わたしの想像をはるかに超える出来事を見た人である．その出来事を見た人が，身近な人の死に直面したときに，その出来事を思いだし，自分の死

について考えるということは，やはり言葉では理解できても，そう簡単にはわからないことである．

カルチュラル・タイフーンでのフロアからの質問には，さしあたり，つぎのように答えるしかない．かならずしも，〈わたし〉の経験を語ることにより，M さんのライフストーリーを理解できるとはかぎらない．けれども，たとえば，はからずして〈わたし〉に生じた身近な人の死について，なるべく冷静にみつめて，それを文章にしようとする．できることなら，そのときに，その体験を「個人的」な体験として意味づけてしまうのではなく，社会という位相で自分自身に生じた体験をとらえてみようとすること．

このような考え方にもとづいて，自分の体験を考えようとすることは，M さんのように歴史的な出来事を体験した人であろうと，それと同じ体験はしていない〈わたし〉であろうと，おなじように心や感情を大切にする営みにたずさわっている人であることを確認できるはずである．その点を見つめていくことが，オートエスノグラフィーを書くことであれ，ライフストーリーを聞きとることであれ，いずれにしても，大切な論点になるのではないだろうか．あまりにも，あたりまえのことのように聞こえるかもしれないが，そのあたりまえを忘れさせるほどに，長崎において M さんが体験した出来事は，人の想像をはるかに超えていくような「出来事」なのであり，その出来事を体験した人が，人としての営みをつづけてきたことに私たちは，なにを感じることができるのだろうか．これは，言葉としては，むずかしくないかもしれないが，簡単に答えることができる問いではないのではないだろうか．

2016 年の 1 月に，M さんが他界されたあと，〈わたし〉は，おおきな喪失を感じた．彼は年齢を重ねていたし，それは自然なことである．しかし，彼の他界は，いうまでもなく，〈わたし〉にとっておおきな出来事である．当時の日記をよみかえすと，そのことが明瞭にあらわれている．そ

して，M さんが他界する前日に，つぎのようなことが記されている．

そこには，母との会話にふれられている．母は，弟が入院をしているときに，病院でボランティアをしようと思ったことがあるという．治療をしたからといって，みんなが助かるわけではないから，それとは，べつのかたちで，人の役に立ちたいと思ったことがあったということ．けれども，いまとなっては，そういうことをしたくないのではなくて，そういうことにかかわることが，こわいと思うということ．

母がそのように考えていたということを，〈わたし〉は，それまで，なにも知らなかった．そのことが〈わたし〉にとって，とても印象に残ったから，日記にも記されているのだろう．この言葉を読むときに，〈わたし〉は，その気持ちが，とてもよくわかるように思う．その言葉は，母という，ひとりの人にとって，その子との関係を明瞭に示している，ゆたかな言葉である．

M さんの死からしばらくの時間が経過している．〈わたし〉は，どこかで，彼とおなじように，自分の心を見つめて生きているのかもしれない．彼の死を伝え聞いたとき，そのときに感じたことを書いた文章を読み，その日の〈わたし〉が感じたことを，もういちど感じて，その意味を見つめようとする．そして，母が，ひとりの人として，その子と一緒に過ごした時間の思い出の語りを聞き，それを記した文章を読む．

このふたつの行為はいずれとも〈わたし〉にとって，大きな意味をもっているように感じられる．わたしにとって，弟の死は，悲しいことである．調査でお世話になった方の死も，悲しいことである．彼らが亡くなったあとも〈わたし〉は生きている．そして，こうした身近な人の死について書くことにより，あるいは，語ることにより，悲しみという言葉では表現され尽くすことのない，さらに広まりのあるゆたかな感情が〈わたし〉には，そなわっていることに気づいていく．そのような感情があることに気づいていくところに，ライフストーリーとオートエスノグラフィーの交

わりと，始まりがあるのではないだろうか.

付記

本稿の執筆にあたり，2016年10月15日に被爆者調査史研究会とライフストーリー研究会の合同で開催された，拙著『〈被爆者〉になる　変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』（せりか書房，2016）の合評会での議論から多くの示唆を得たことに感謝したい．本稿には十分に反映させることができなかった論点については稿をあらためて検討したい．写真は，2008年4月に長崎水辺の森公園にて撮映したものである.

文献

浜日出夫，2007,「ヒロシマを擦りとる」山岸健責任編集『逍遥する記憶　旅と里程標』，三和書籍.

東松照明監修，2005,『長崎曼荼羅　東松照明の眼1961～』，長崎新聞社.

飯沢耕太郎，2003,『写真とことば　写真家二十五人，かく語りき』，集英社新書.

岡原正幸，2014,「喘息児としての私　感情を生きもどすオートエスノグラフィー」岡原正幸編著『感情を生きる　パフォーマティブ社会学へ』，慶應義塾大学出版会.

若松英輔，2015,『悲しみの秘義』，ナナロク社.

White, Hayden, 1992, “Historical emplotment and the problem of truth”, Friedlander, S., Probing the Limits of Representation, Harvard UP.（＝1994,「歴史のプロット化と真実の問題」上村忠男他『アウシュビッツと表象の限界』未来社，57–89.）